「水辺を描く」展によせて

文人画家たちの描いた水辺

「秋溪訪友図」（大和文華館蔵、挿図1）を描いた岡田半江（1782～1846）は、近年ますます注目を集める大坂画壇の代表的な絵師の一人として知られています。この図には水辺に住まう文人のもとに、友人が小舟に乗って訪ねてくる場面が描かれています（挿図2）。文人の住まいは高くそびえる山の崖に接するように設けられており、敷地を囲む垣根の門は水辺の方面に向いて設置されています。絵の作者である半江は藤堂藩の大坂蔵屋敷に仕えていましたが、四十一歳の頃に職を辞し淀川沿いで隠居生活を送りました。天保八年（1837）には大塩平八郎の乱によって大阪市中が焼け、住吉に移住しました。「秋溪訪友図」に描かれた水辺に住まう文人の姿には半江自身の姿が重ねられているとも考えられるでしょう。

詩を贈るなど大塩平八郎（1793～1837）とも交流のあった半江ですが、文人画家として名の知られた浦上春琴（1779～1846）とも交流がありました。春琴も文人の住まう水辺をしばしば描いており、「秋景山水図」（滋賀県立琵琶湖文化館蔵、挿図3）はそのひとつです。この図では、水面にせり出して建てられた庵の窓辺で文人が読書をしています。手前に描かれた樹木の葉は赤く色づき、季節が秋であることを示しています。春琴はおもに京都で活動していましたが、京都だけでなく全国各地から制作依頼を受けるほどに人気を博していました。さらに天保十三年には、画の精神を詩に詠んだ『論画詩』を刊行しており、文人画家としての世間の評価も高かったようです。『論画詩』のなかで春琴は「夫れ画く者は胸中の邱壑を写すなり。胸中に邱壑無ければ、則ち画を作るべからず。」（原漢文）と述べており、心の中にある山水を描くという中国の伝統的な考えに基づいた制作を理想としていたことがわかります。「秋景山水図」の中景の山はもこもこと隆起を続けているようにも見えますが、これは春琴作品に見られる特徴的な山の形であり、春琴の胸中にそびえる山がいきいきと画面に表れているのでしょう。

さらに春琴の「秋景山水図」には漢詩文で著名な頼山陽（1780～1832）が詩を書きつけています（挿図4）。これは『山陽詩鈔』巻六に収められた「移居築園雑詠」の冒頭部分で、文政四年（1821）に京都の木屋町から両替町通押小路上ル東に移り住んだ際に詠まれた詩です。東山を見る喜びが無くなってしまうのが心配なため引っ越した（根津全孝『山陽詩解巻二』1878年）、あるいは、東山を見る喜びが無くなってしまうのを恐れていたのに街中に引っ越してくることになるとは（伊藤靄谿『山陽詩鈔新釈』1942年）、など詩の解釈はいくつかありますが京都の東山を眺める喜びを前提とした内容です。図の山々は実際の東山とは全く異なる姿ですが、山を遠くから眺める楽しみという共通性からここに選ばれた詩だったのだと思われます。

先に紹介した『論画詩』の翌年に刊行された『続論画詩』には、自身も画論書を著した文人画家の中林竹洞（1776～1853）が跋文を寄せています。竹洞筆「夏山飛瀑図」（滋賀県立琵琶湖文化館蔵、挿図5）の落款には天保十二年の干支が記されており、竹洞が東山に隠棲して以降に描いた作と見られます。画中には橋を渡る文人の姿が見え、その奥には題の通り滝が流れ落ちています。墨のみで描かれた作品で、水流は白く塗り残すことによって表されています。類似の表現が、竹洞と同郷で友人でもあった山本梅逸（1783～1856）の「高士観瀑図」（大和文華館蔵、挿図6）にも見られます。滝を見上げる文人の近くを流れる水は塗り残しによって表され、合間にのぞく岩の描写が水流の立体感や奥行きを示しています。梅逸の「高士観瀑図」と竹洞の「夏山飛瀑図」は水墨中心に描かれている点も共通していますが、梅逸作品は明晰な描写で木々や岩などが表されており爽やかな印象なのに対して、竹洞は点描を中心に用いて湿度の高いもやもやとした空気感を作り出しています。

「水辺を描く」展の出陳品のうち、いわゆる文人画家による作例をいくつかご紹介しました。半江、春琴、竹洞、梅逸は皆近い時期に活躍していた人物で交流もありました。清らかな水辺に憧憬をもって描いていたのは皆同じですが、得意とする画風や画題はそれぞれに異なっています。作者や作品によって異なった表情を見せる水辺の絵画を展示で味わっていただければ幸いです。（仁方越洪輝）


図1


図2


図3

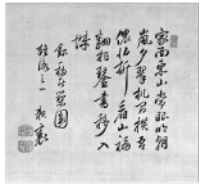

図4


図5


図6

季刊 美のたより No.232
令和７年 ９月 26日
発行 大 和 文 華 館

Copyright © The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.